

千秀だより

横浜市立千秀小学校

9月号

平成28年(2016)8月29日



オリンピック・万葉集に教育を見る

校長 市川幸男

長かった夏休みが終わりました。地域や訪れた先でいろいろな体験をし、真っ黒に日焼けした子どもたちが、一回り大きくなって登校しました。休み中、静まり返っていた教室が一気に元気になりました。やはり学校は、子どもたちあつての存在です。子どもたちには、夏休み前に、「自分の責任で」と「一生懸命・夢中になって」ということを大切にして夏休みを過ごしてほしいという話をしました。今、子どもたちの自信にあふれた元気な姿を見たとき、きっと「ちゃんと早寝・早起きし、ちゃんといろいろな事に、夢中になって取り組んでくれたな」と嬉しく思いました。夏休み中の貴重な体験を大切にしながら、これから始まる前期のまとめ、そして後期へと、勉強や運動、諸活動に夢中になって取り組んでいってくれることを期待しています。

さて、今年の夏の話題はというと、オリンピックにつきるのではないのでしょうか。体操の内村選手や柔道の選手、男女卓球の活躍等々、いずれも大きな感動を与えてくれました。そんな選手達が共通して、支えてくださったコーチや多くの支援者への感謝の言葉を口にしています。1人の選手のために影になって、選手の技能の向上はもちろんのこと、身のまわりの環境を整えたり、時には取替えてきつい言葉を投げかけたりして育成するコーチやスタッフの努力を、選手自身も感じ取っていたのだと思います。そんな関係を見て、ふと次のような歌を思い出しました

はぎ おばな くずばな

おみなえし ふじはかま あさがお

「萩の花 尾花 葛花 なでしこの花 女郎花また 藤袴 朝顔の花」

これは、万葉詩人として有名な山上憶良の、秋の七草の歌です。日本最初の数え歌とも言われています。万葉集には男女の愛を歌った歌が、たくさんありますが、山上憶良は一貫して、子どもを思う歌を詠んでいます。有名な「瓜食(は)めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ」はその代表作とも言えるでしょう。上に挙げた歌は、きっと憶良が、秋の野に咲いている花を、子どもたちに指折り数えながら、教えた時に作った歌なのではないのでしょうか。萩の花から女郎花までの5つの花を、身がかがめ子どもの目線の高さで、一方の手で数えさせ、「また」を転換語として、もう一方の手に移る。そういう情景を詠んだものだと思います。子どもの目線に立って、実体験を大切にしながら子どもとともに学び、教え、育てていく。これは、子どもにかかわるすべての人が大切にしていけるべき姿勢なのだと、日本最初の抒情歌集「万葉集」の中で、山上憶良は教えてくれています。

先に述べたオリンピック選手にとってのコーチやスタッフの存在についても、同様のことが言えるのではないのでしょうか。選手を大切な存在と捉え、理解し、追従ではなく選手にとって必要だと思われることを、具体的にそして継続して実施していく。

振り返って見て、学校や家庭ではどうでしょう。夏休みが終わって、学校生活が中心となる日常が始まりますが、ここは良い。あれはできない、これが足りないと言っただけでなく、学校、そして子ども達の母体である家庭が協働して、子どもと共に考え、共に体験し、時には苦言を口にしながらも、あきらめることなく寄り添い、一つひとつの課題の解決を支えていかれる存在でありたいと思っています。そんなことを考えた夏休みでした。